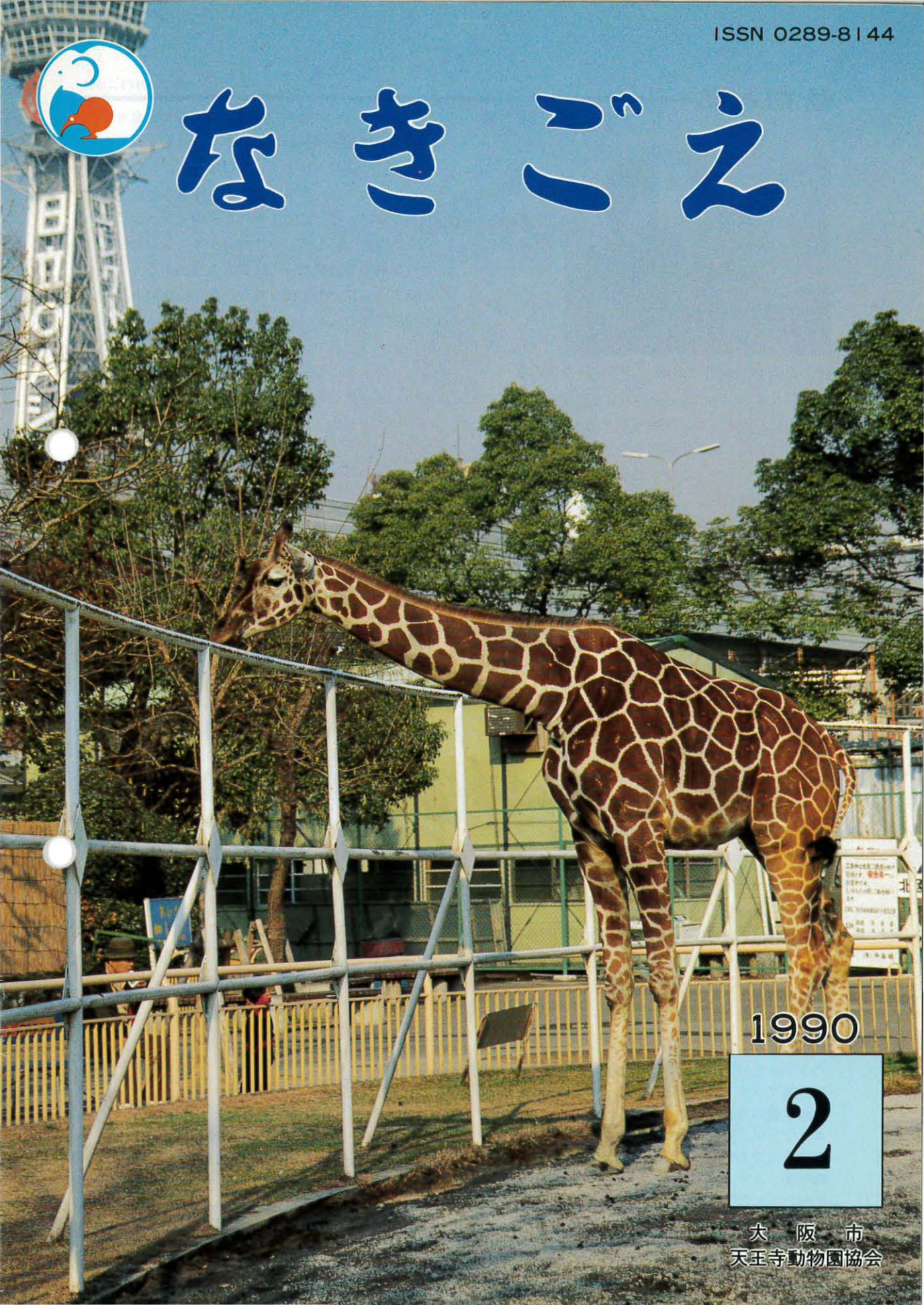




なきごえ



1990

2



今から30数年前、小学校1年生の時 私は初めてフクロウに出会った。

その頃住んでいた大阪の郊外のお墓の中の大きな楠の木にそいつは止まっていた。それからというもの私のフクロウ狂が始まった。図鑑や本で色々調べたり、鳥の先生に手紙を出して質問したり、もちろん自分であちこち歩いてフクロウを捜したり、また外国産も含めて10数種類のフクロウを飼育した。そして今は、北海道根室に住みついてシマフクロウの生態調査を継続して行っている。シマフクロウとの出会いは最初から私の心を激しく揺さぶった。図鑑で見た時も父親に連れられて行った天王寺動物園で初めて見た時もそして知床の森の中で野生のベアーをようやく見つけた時も、いつもそのフクロウ離れした大きさに圧倒された。

シマフクロウの調査を始めて18年、根室に住んで9年が経ち、やっと観察を行っている数番いの孫まで見られるようになった。シマフクロウは生態面での他のフクロウ類と異なる点が多い。魚を主食にしていることもそうだが、私が一番興味をもっているのは、子育てに非常に長い期間を費やすということだ。他のフクロウはフ化したその年には親鳥と離れてしまうが、シマフクロウは、3年目の春に親わかれをする。さらに長い例では4年目の春ということもあった。なぜこれほど長期間親鳥と一緒にいるのか今だによくわからない。まだまだこれからだ。

シマフクロウは現在、100羽足らずしか生息せず、環境庁では増殖事業を進めており、私もそれに携わっている。巣箱などによる自然増殖がメインだ。巣箱の成果が上がる一方で毎年何羽か保護されたり死亡したりしている。私も1昨年1羽のシマフクロウの幼鳥を保護し約1年かけて放鳥することができた。これは貴重な経験だった。巣立ち後間もなかったその幼鳥は両足が全く使えない状態で獣医師の診断でも原因不明だった。しかし一番考えられるのは脊髄損傷ということではほとんど絶望的ともいえる状況だった。でもどうしてもあきらめきれず薬の投与と給餌時に毎回両足のマッサージを行った。それがよくなったのか収容後一週間目で少し支えてやると約1分間片足で立つことが出来た。その後もマッサージを続け1ヶ月経つと約1mの高さの止り木に飛び移れるようになった。3ヶ月目には、フライングケージに移した。広さは高さ6m縦10m横20mである。その中で順調に回復し、生きた魚やネズミを自力で獲えられるようになった。そして冬期間も吹きさらしのケージで乗り越え、昨年の7月に放鳥したのだった。放鳥後1週間はケージに入ろうとしていたが、やがてそういう行動もなくなり、2、3日姿を見せなくなったりすることが多くなった。ある時は3週間も姿を見せず、あきらめていたが再度戻ってきた時の変貌に驚いた。すべての行動が機敏になり、精悍な顔つきになっていた。きっと自然が鍛えてくれたのだろう。今では数km以上を行動圏にしておりやがてつれ合いを見つけて繁殖してくれるだろう。

フクロウと出会ってから、今までに何10羽ものフクロウ類を保護し放鳥してきた。でもこのシマフクロウのように、絶望から希望に変わった例は少なく、私のこれからのフクロウ人生を大いに励ましてくれるものであった。

(鳥獣保護委員)

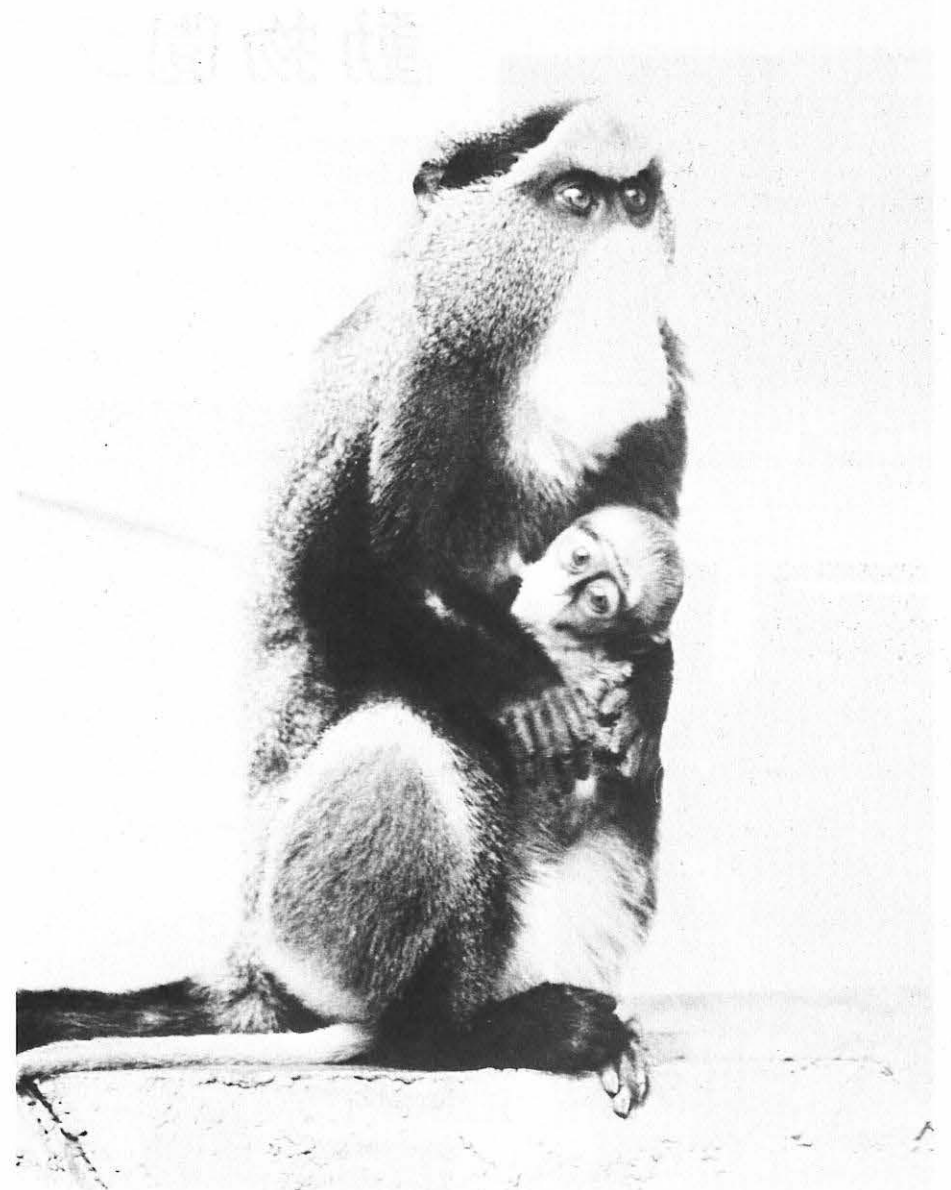
なぎごえ2月号もくじ

動物と私	2
“ブラッサグエノンの赤ちゃん”	3
動物園グラフ・動物園日記	4・5
大台ヶ原の自然と動物	6・7
カラフトフクロウとシロフクロウの生態	8・9
動物なんでも相談室	10
動物園ニュース	11

表紙の写真説明

アミメキリン

春が待ちどおしいのか首を伸ばして通天閣とせいくらべ？おすのキリンもそろそろ成獣になってきたのかこげ茶色の毛づやが鮮やかになってきました。(撮影：山下 賢二)



“ブラッサグエノンの赤ちゃん”

昨年11月14日におすの赤ちゃんが生まれました。寒さにもかかわらず元気に育っています。サルハウスではこの他にもフランソワルトンをはじめ多くの赤ちゃんが生まれ大変にぎやかです。

(撮影：飼育課 土谷 正道)

動物園グラフ

“バクの赤ちゃん”

昨年12月6日にアメリカバクにおすの赤ちゃんが生まれ元気に育っています。一昨年に引続いてのおめでたです。南アメリカの暖かいところが原産のバクのことですから寒さは苦手なのですが、こんなに元気です。

(撮影：飼育課 大川 光 雄)



10日後には運動場で一般公開し父親とも同居させました。



何かねだっているしぐさはとてもかわいらしいですね。



赤ちゃんはきれいな白い斑紋があり、保護色となっています。半年ほどで親と同じようになっています。



お乳を飲む赤ちゃん

11・12月の動物園日記

11/29. タヌキを1頭保護しました。

11/30. 一昨年生まれのタンチョウを内視鏡による性別鑑定を行い、めすと判定しました。オオミズナギドリを1羽保護しました。ワシントン条約にもとづいて緊急保護されたモモアカヒメハヤブサを、タイ国へ返還しました。

12/6. アメリカバクのオスの赤ちゃんが1頭生まれました。体重は7kg、体長は58cmありま

した。

12/8. カラフトフクロウ舎に巣材を入れました。

ワシミズクが1卵産卵しました。

12/10. アメリカバクの子がキャベツとサツマイモを少し食べはじめました。

12/11. リュウキュウイノシシのオスの牙が長くのびすぎ、それによって上あごの部分に損傷するため、麻酔し、牙を切除し治療を行いました。

12/12. フランソワルトンにオスの赤ちゃんが生まれました。オスの赤ちゃんははじめてです。



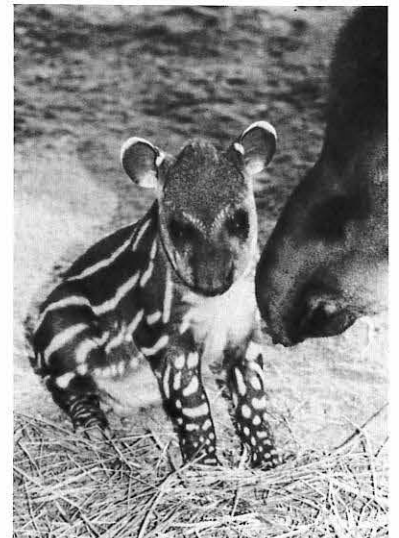
このごろではお乳の他にも親の餌を食べ出しています。歯が見えますか。



お乳を飲んで満足すると横になって陽なたぼっこ。



父親もとてもかわいがっているようで、同居もスムーズにっています。



眼の上の白い斑紋がまゆ毛のようすし、耳のつけねの白い毛もかわいらしいですね。

12/12. 11月14日生まれの子のブラッサモンキーの子の性別がオスと判明しました。

12/13. 天津動物園の劉国民獣医師と張訳殿飼育係が来園見学されました。

12/15. マントヒヒの赤ちゃんが1頭生まれました。

12/16. 12月6日に生まれたアメリカバクの赤ちゃんを一般公開しました。

12/16. チャムネシャクケイが産卵しました。

12/18. シシオザルの赤ちゃんのへそのヘルニア手術を行いました。

ライオンのメス“ハル”の左前足にガチョ

ウ卵大のはれものができたので、摘出手術を行いました。

12/19. コアラの血液検査を行いました。

12/22. チャムネシャクケイの卵を電気ふ卵器に入れました。

12/24. カモシカ園の池に今年もカルガモが87羽飛来しました。

12/25. ブラックバックが1頭生まれました。

12/26. レニングラード動物園よりフクロウと同時にいただいたハリネズミが交尾しました。

12月から4月の末まで、大台ヶ原では静かな季節が過ぎて行きます。

鹿の鳴く声が冴え渡った秋の夜空に溶けて行き、リスがせきたてられたように冬籠りの仕度をしてい



冬の東大台、-20℃位まで下ります

平成元年の大台ヶ原は、例年に比べ、若干、観光客が多かったような感じがします。森を歩く事が静かなブームになっているせいなのか、もしくは、山歩きの服装や持ち物がカラフルになって、少なくとも外見からは、汗くささがなくなったせいで、気軽に山に出かける時代になったのかもかもしれません。

ところで、私達は便宜上、管理事務所やバス停のある駐車場

を境にして、大台ヶ原を東大台と、西大台に分けています。どちらかと言えば、展望の開けた、広々とした自然を好む



広々とした東大台

人が大多数らしく、おしなべて、高原でお弁当を広げたり、軽くハイキングを試みよう、と言った感じですが。標高1695mの日出ヶ岳では、眼下に太平洋が広がり、良く晴れた日の早朝に、富士山が見える事もあります。また、よほど運が悪くないかぎり、歩道からでも野生の鹿を見ることも出来ますし、夏には、コマドリやミソサザイなど高原の鳥の声も楽しめます。1年間に、約50種類の野鳥が飛来するようで、バードウォッチングを楽しむ人も、最近、大変増えています。東大台には、他にも吊橋があったり、切り立った崖の上から眺望を楽しめる場所があったりで、ほとんどの方が大台ヶ原といえば、東大台のイメージが強いのではないのでしょうか。一方、西大台は、一般の人にはあまり入らないので、いつも静かで、深い森の雰囲気を楽しめる森なのです。ただし、その大部分が原生林なので、少し薄暗く、ジメジメした感じがします。しかし東大台よりは、よほど森としては西大台の方が立派な感じがします。大

台ヶ原は2年前、国立公園の中でも、最も規制の厳しい特別保護地区に指定されましたが、これは、東

大台も勿論ですが、特に西大台の原生林を守るためには、大変良かったと思っています。というも、森が立派な



アナグマです。

おかげで、ひょうきんな顔ですが、かなりどうもうです。昆虫や、野鳥などの数も多く、そのためいつも密猟者に狙われているからです。しかも、その大半は、明らかに商売人なのです。彼らの手口は悪質で、ますます巧妙になっています。朽ち木を斧でバラバラに砕いて、中の幼虫を盗る連中や、幾つもカスミ網



アサギマダラ

を張って、コマドリやミソサザイを狙う者が後をたたないのですが、ここ数年、県警と協力して、かなり厳しく取り締りも

らったおかげで、ようやく違反者の数も減って来ました。ところで近年、大台ヶ原では鹿のことが取りざたされることが多くなりました。大台ヶ原の鹿は、他の地域のものとは、少し違った習性を持っています。普通、雪の降る頃になると、鹿は標高の低い所へ降りて行くはずなのに、ここでは、二月の厳冬期でさえかなりの数が居残っているのです。その原因は、戦後、麓の森林が広範囲に伐採されたのが遠因ではないかと言われていました。ところが、明治時代以前に、12月に大台ヶ原に登り、刀掛けにするための三ノ又(5才以上の雄鹿や、その角を意見する方言)を狩りに行った、という話が残っていた事が最近分かってきて、少なくとも百年以上も前から、大台ヶ原では、冬でも鹿がいた事が分って来たのです。そんなわけで、結局この変な習性についての結論は、今後の調査、研究の成果を待たざるえないようです。実は、大台ヶ原の鹿が注目され始めたのは、もう一つの奇妙な習性のせいなのです。

マスコミなどで取り上げられる機会も多いですが、ご存じの方も多いたと思いますが、それは、大台ヶ原山頂付近のトウヒ林の枯死と、鹿の関係からなのです。トウヒというのは、モミに似た木ですが、樹皮は鱗状で黒く、葉はモミに比べて細くてやや長い

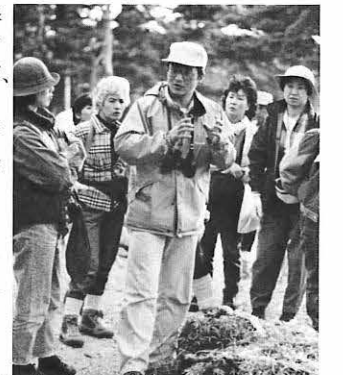
のが特徴です。ここのトウヒ林は、純林としては、日本の南限のものだそうです。そのため、学術的にも非常に貴重な林だと言われています。その林を枯らしている主な原因は、鹿の食害によるものと分って来たのです。どういう理由からなのか、十数年前から、鹿がトウヒの樹皮をしきりに食べる様になったのです。そのために次々と枯れ始め、特に正木峠付近の林では、健全木は、2%以下にまで減ってしまっ、まさに瀕死の状況なのです。そこで、とりえず播種を行って、トウヒの苗木を確保したり一部に柵を設けて、鹿の食害を防ごうとしています。最終的な目標は、二十数年前のように、柵などなしに、鹿とトウヒ林が共存できれば良い、と言う



ことでしよう。ところが、一口に共存とは言っても、冬でも食餌の笹が十分あるのに、なぜ食害が始まったのか、そして、なぜ十数年前からこれ程急に増えたのか、更に、なぜ食害の対象木がトウヒやウラジロモミなどの針葉樹なのか、それらの疑問に、まだ一つも明確な答えは見つからないのです。しかも、酸性雨や台風、それに、7~8年周期で大発生を繰り返しているトウヒツリハマキ(トウヒの葉などにつく害虫、蛾の一種)が、食害によって樹勢の弱まっているトウヒ林に、決定的な打撃を与えるかもしれません。ところが、「大台ヶ原のトウヒ林は消えて行く運命にあるとしても、その速度を少しでも遅らせて、その間に、出来るだけ調査、研究をしなければ。」などと言っている間に、「トウヒ林が枯れても、見晴らしの良い笹原が出来のだからそれもいいのではないか。」とか、「自然を管理しようなんて、高慢だ。」などと、他からの声も聞こえてきます。いづれにしても、たかが鹿が投げよこした、食害の問題一つで、人間の世界は、諸説・御意見は百花繚乱のようすなのです。そして私などは、その中から、自然の複雑さや自然保護の難しさを、あらためて知ったような気がします。

人間の喧騒など知らぬ顔で、鹿達がのんびり草を喰んでいます。2~3年前から、大台ヶ原の鹿の中に、人間をまったく恐れない鹿が増えて来ました。観光客の中には、野生の鹿の写真が撮れる、と言って喜んでる人もいます。でも私は、そんな鹿から、少しも凜とした美しさを感じないのです。それは、私が野生や自然といった言葉に対して持っているイメージと、現実があまりにも違うからかもしれません。西大台の原生林の中でも、何か物足りないよう

な気がする時があるのです。それは、森に狼がいないからです。そんなことをいうと、たいていの人には、「狼ですか?」などと不思議そうな顔をします。最後に狼が捕獲されたのは、80年以上も昔の話ですからそれが当然の話です。しかし、その狼が日本の最後の一頭だったとは考えられませんし、むしろ、そう考える方が余程不自然です。その後も紀伊半島の各地では、昭和20年頃までは、狼を見た、声を聞いたと言う人は沢山いたのです。しかし今、我々の目の前に狼らしき獣が姿を現したとしたら、それがニホンオオカミかそうでないのか、いったい誰が同定出来るでしょうか。剥製や頭蓋骨は何体か残されていますが、それらの間の個体差が大きすぎて、とても原本の供試には出来ないと言われているのです。ですから、「個体差が大きいのは、日本には2~3種の狼がいたからだ。」と言う研究者もいるくらいです。つまりそれは差ではなく、元々、別の種の狼だと言うのです。つまり狼は、私のようなアマチュアは勿論ですが、本格的な狼研究者にとっても、ほとんどイメージの中の動物なのです。しかし、絶滅したと言われ、また幻の動物といわれ始めてから、こんなにながれ年月がたった今でも、確立した姿のない狼について語り、探し求める人が少なくないのはなぜでしょうか。まるで蟹気楼に向って進んで行く旅人のようではありませんか。それでも、どこか遠い所に実体のある蟹気楼の方が、「幻の動物」といわれるよりは、納得がいきます。そして私も、大台ヶ原で、その蟹気楼を見ているのかもしれない。けれども、大台ヶ原のトウヒや、ブナの老木の、百年前の年輪には、間違いなく、あの狼の獣臭や、山々に響く咆哮が記憶されているのです。その頃、森は整然と、自然の掟に守られていて、森に棲む全ての生物は、あらゆる気配に緊張し、獣達は常に敏捷だったのです。もし今、荒廃しつつある森に狼が戻って来たら森は再び本来の姿を取り戻すかもしれません。



夏休み中の自然観察会。けっこう難しい質問もあって四苦八苦する事もあります。

「森は生きている」とよくいわれます。大台ヶ原で四季の移り変わりを見ていると、その大きさは比べようもなく違うけれど、森は、昆虫と同様に、本当に生きていると思うのです。やがて、春陽の中で根雪が消えて行きます。白い雪の、蛹の中で眠っていた大地が、その殻を脱ぎすてて、再び動き始めます。

(大台ヶ原管理事務所)

カラフトフクロウとシロフクロウの生態

なきごえ26(2),1990

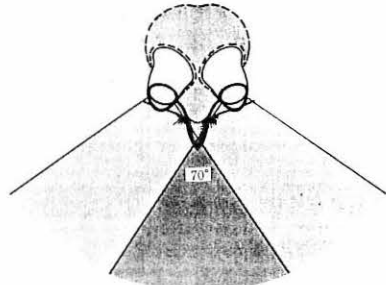
昨年の11月11日に大阪市の妹妹都市であるソビエト連邦のレニングラード市の動物園からカラフトフクロウとシロフクロウが、それぞれ1番ずつ来園しました。カラフトフクロウは日本で初めて、シロフクロウも当園には初めてのお目見えとなりました。

これで当園のフクロウ類は、以前から飼育しているオオコノハズク、ワシミズク、アオバズク、ホンドリフクロウに今回の2種を加えて6種になりました。そこで今回はフクロウ類の一般的な特徴と新しく来園したカラフトフクロウとシロフクロウの生態を紹介しましょう。

§ フクロウ類の特徴

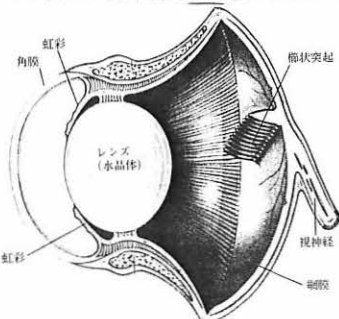
フクロウ類は、ワシやタカ類が昼の猛禽といわれるのに対して夜の猛禽といわれています。しかし、130種以上あるといわれるフクロウのうち3分の2以上が夜行性であるといわれています。餌はネズミなどの小型の哺乳類、小鳥、昆虫などで、魚を食べるものもいます。

夜に狩をするために、すぐれた視覚を持っています。眼球は非常に大きく、顔の正面にあるため両方の目で物を立体的に見ることのできる範囲が広く、餌物までの距離を正確に判断することができます。しかし、視野は狭く、ハトが340度、ヒトが180度に対してフクロウ類は110度しかありません。その不



フクロウの視野

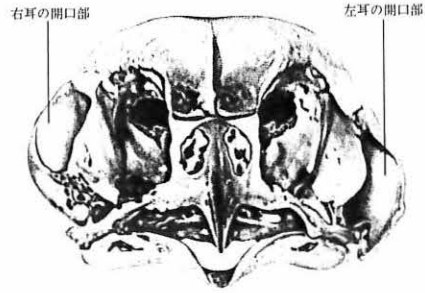
利な点を克服するため頭をまわして真後を見ることが出来る柔軟な首を持っています。フクロウの目は哺乳類の眼と比べるとレンズ（水晶体）が非常に大きく、レンズと網膜の間が短かいので、餌物をはっきり識別できる大きな像を網膜上にむすぶことができます。大きなレンズを収容するため眼球は球形というより筒状をしています。網膜は色を識別できる円錐細胞より、わずかな光でも区別できる棒細胞でできているため、夜でも餌物をよく見ることができます。



ワシミズクの目の断面図

細胞でできているため、夜でも餌物をよく見ることができます。

視覚ばかりではなく聴覚もすぐれています。耳は羽毛におおわれているため、外観上は見ることができませんが、羽毛を押し分けてみまると眼球の外側に、顔の上から下まで達するような大きな耳介があります。多くの聴覚のすぐれたフクロウでは左右の耳の位置が上下にわずかにずれているため、餌物であるネズミなどがたてるわずかな音の位置を正確に判断することができます。



キンメフクロウの頭骨(左右の耳の開口部が異なることを示す)

また、フクロウ類は餌物に気づかれないように、音をたてずに飛ぶことができます。全身は柔らかい羽毛におおわれており、翼の羽毛は他の鳥のように金属光沢がなく、羽の上を空気が流れやすいように溝がついており、音をたてずに飛ぶことができます。このようにフクロウ類は夜の猛禽として、すぐれた能力を持っています。

フクロウ類は主に森林に生息していますが、シロフクロウのように北極圏のツンドラ地帯に住むものや北アメリカのアナホリフクロウのように砂漠に住むものもあります。森林に住むものは樹洞や樹上に巣を作り、砂漠やツンドラ地帯に住むものは地上に巣を作ります。2~3日間隔で産卵し、初卵の産卵後、すぐに抱卵するので、それぞれの卵の孵化は産卵間隔に応じずれます。そのためヒナの成長には差が出るので、餌が充分ない場合、先に孵化した強い雛は餌を先に取り、後に孵化したヒナは育たないことがよくあります。少しきびしいようですが、餌の少ない年でも共だおれになることなく、確実に1羽でもヒナを育てることが出来ます。種の保存のために自然が考え出した知恵

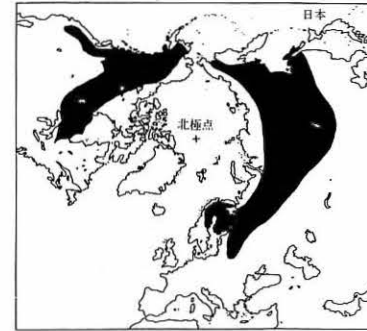


カラフトフクロウに感心せざるをえません。

なきごえ26(2),1990

§ カラフトフクロウ

カラフトフクロウはヨーロッパと北アメリカ北部の亜寒帯の針葉樹林帯に生息しています。大きな顔の中心に黄色い目があり、目を中心に同心円状の縞模様があります。眼球の大きさは直径12.5mmしか



カラフトフクロウの分布図

く、他のフクロウ類(モリフクロウで16~17mm)に比較すると小さい目をしてしています。全身は灰褐色で暗褐色の縦斑と横斑があります。全長610~840mmあり、フクロウの仲間では大きいほうですが、寒さから身を守るため羽毛の量が多いので、体重は意外に軽く、それほど大きさの変わらないメスのワシミズクの体重が約4,000gに対して、カラフトフクロウはオスで535~1,100g、メスで1,900g以下しかありません。

北ヨーロッパでは主にモミヤマツの森林で営巣しますが、湿地帯の中にあるマツやカバの木に営巣することもあります。テリトリーは非常に狭く、スウェーデンでは2つの巣が100mしか離れていなかった例があり、フィンランドでは400m以内に3つの巣が見られたことがあります。多くのフクロウ類は樹洞に巣を作りますが、カラフトフクロウはオオタカやノスリやイヌワシなどのワシ・タカ類の古巣を利用します。新しい巣材をたすことはなく、単に巣の中心を深くして利用します。

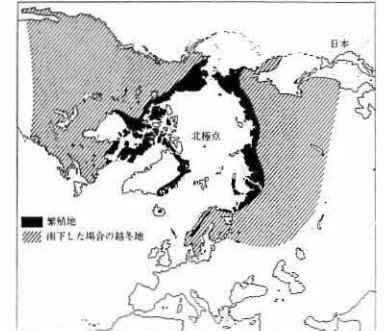
フィンランドでは2月中旬に繁殖期特有の声が聞かれるようになり、4月中旬から5月中旬に産卵します。約4日間隔で産卵し、平均4卵産みます。卵は他の樹洞に巣を作るフクロウより楕円形をしています。孵化日数は約30日で、巣立ちには約3週間かかりますが、巣立ち後6~8週間は巣の近くにおり、数か月は親のテリトリー内にとどまります。

昼も夜も狩はしますが、日ごしの強い日中や真夜中には成功率が落ちるようです。主な餌はハタネズミやトガリネズミなどで、時にカエルや小鳥なども捕食します。ヨーロッパでは通常ソビエト北部に留鳥として生活していますが、ハタネズミの少ない年には冬期スウェーデン南部やドイツまで移動します。もしそこでハタネズミが豊富にいれば、そこにとどまり繁殖することもあります。

§ シロフクロウ

シロフクロウは全長53~66cmで全身が白色で顔とノド以外に黒褐色の斑があり、オスはメスより白くほとんど斑のないものもあります。北極圏のツンドラ地帯で繁殖し、あまり渡りをせず、冬期も少し南

へ移動するだけです。しかし、4~5年に1回通常の越冬地よりはるか南へ移動することがあり、その時はヨーロッパ南部、中国、インド北部、日本の北海道、アメリカ合衆国南部、パーミューダ諸島でも記録されます。この移動は餌であるレミングとホッ



シロフクロウの分布図

キョクウサギの数が影響しています。レミングは餌が多くある時は急速に増加しますが、食べ物である植物を食べつくしてしまい、4~5年後までその影響は残ります。ホッキョクウサギも同様ですが、その周期はレミングより長く10年間隔で増減します。餌である動物の増減は、捕食者であるシロフクロウの数に影響するのは当然であり、餌である動物の数が減少し始めた時にシロフクロウの数は最も増加しており、餌がないため南下することになります。



シロフクロウ(オス)

狩は主に夕暮と早朝に行いますが、北極圏の夏の白夜は長く日中も狩をします。ツンドラ地帯のほぼ全域で繁殖しており、岩かげなどの地面のくぼみに産卵します。レミングの多い年には9~10km²に1番が見られます。産卵時期は早く、まだ雪の残る5月中旬に産卵します。産卵数は餌である動物の増減に影響されますが、通常5~8卵で、多い時には13卵も産みます。1日おきに産卵し、初卵からメスが抱卵に入り、孵化日数は32~34日です。51~57日令で巣立ちしますが、キツネやトウゾクカモメに食べられるため、ヒナの死亡率は高いようです。また高いヒナの死亡率には北極圏の短い夏のため狩の方法を充分学習できないことも影響しています。

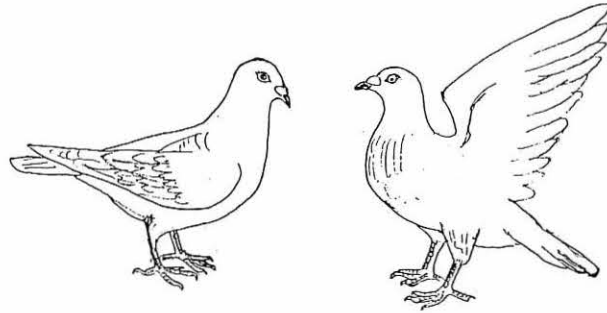
(図版はいずれも Owls of the world, Edited by John A. Burton, 1973より)

(飼育課: 榊原安昭)

☆ドバトは街ではたくさんいるのに山に行くとはほとんど姿を見かけませんが、どうしてでしょうか？

ドバトは正しくいえば野鳥ではないかもしれませんが、もともとユーラシア大陸の中南部の岩場などに生息していたカワラバトという鳩が人間の手で飼育され、長い間に改良もされ伝書鳩などが作りだされました。それらが再び、野生化したものです。ですから、人間にも馴れていますし、街の中の建築物やビルの空間はドバトにとっては一番条件のいい巣作りの場所になっているわけです。街の中がドバトにとっては、遠い祖先の生活に最も近いのかも知れません。

(回答：大野尊信)



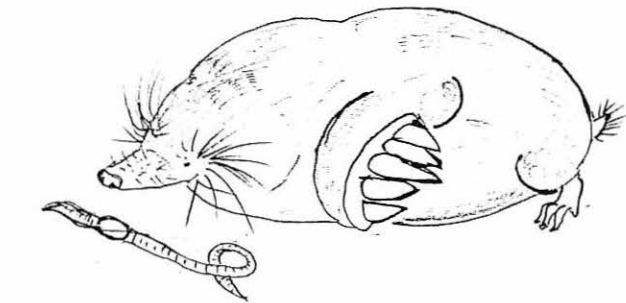
☆モグラは太陽にあたると死ぬのでしょうか？

ほとんど役に立ちません。そのかわり、触覚が発達しています。

つかまえて土の上に出すと、まるで太陽から逃げるように、すぐもぐってしまうのは、光に反応しているわけではなく、体に土を感じるところが腹部だけになり、大変不安になるのです。ですから、飼育する場合は、金網の筒を人工のトンネル状に組合せて飼育します。モグラは1日に自分の体重と同じ量の餌を食べます。ミミズやケラ、クモといった昆虫類を食べています。約4時間の採食と休息を交互にとっています。モグラは皮膚の触覚

器官が哺乳類中で最も多いことから医学の研究に利用されています。身近であっても意外と知られていない動物も、動物園で観れるようになればいいですね。

(回答：大野尊信)



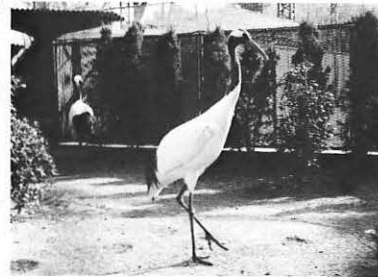
モグラという名前やそれが土の中にトンネルを掘ってすんでいるということは、よく知られていることだと思います。でも実際にその姿を見たことがある人は案外と少ないのではないのでしょうか。モグラはほとんど地中の生活をしているため、目は小さく、

§ タンチョウの交換

稀少動物であるタンチョウの繁殖をはかるため奈良市のあやめ池遊園地動物園との間で雌雄の交換の話がまとまり、12月6日に実施しました。

当園では京都市動物園からお借りしている2羽を含めて、10羽のタンチョウを飼育していましたが、昨年生れの性別不明の2羽を除いて雄は3羽しかいませんでしたので、新たな繁殖ペアをつくるため、雌雄交換できる動物園を捜していました。

来園した雄は昭和59年6月11日にあやめ池遊園地動物園で繁殖したもので、5歳であり、そろそろ繁殖可能と思われる。さっそく当園で7年連続繁殖に成功した実績のある北京動物園から昭和49年に来園した雌と見合わせ、12月14日には同居させることができました。仲は良さそうですので今春の繁殖が楽しみです。



新着のタンチョウの雄

§ アメリカバクの誕生

12月6日、アメリカバクのオスの赤ちゃんが生まれました。当園のアメリカバクは雌雄共に一昨年の6月20日から横浜市金沢自然公園から繁殖のため

にお借りしているものです。母親の“マーガレット”は横浜で1産した後に来園し、当園では一昨年の9月19日に続いて2回目の出産です。

アメリカバクの赤ちゃん 生まれた赤ちゃんは体重7kg、体長58cmでこげ茶の地に白いたてじまの斑点があり特徴的です。出生後しばらくは母子共に寝室に収容していましたが、12月16日から一般公開しました。

§ サル舎の出産ラッシュは続く

先月号でマントヒビとブラッサグェノンの出産をお伝えしましたが、その後12月に入ってからも12日にフランソワルトン、15日にはマントヒビが生まれました。

フランソワルトンは昭和58年10月に中国の上海動物園から来園して以来、昭和60年、62年にそれぞれ

現在の飼育動物数

(平成元年12月31日現在)

哺乳類	12目	104種	460点
鳥類	20目	188種	724点
爬虫類	3目	34種	82点
合計	35目	326種	1266点



金色の毛に包まれたフランソワルトンの赤ちゃん

メスを出産しており、今年が3回目の出産です。フランソワルトンの成獣は全身のほとんどが黒い毛におおわれていますが、赤ちゃんは美しい金色の毛をしており、非常に目立つので人気を集めています。

一方マントヒビは12月15日に生まれましたが、今回出産した雌は、今年の5月18日に白浜アドベンチャーワールドから来園したもので、当園では初めての出産です。11月13日には同居しているメスが産んでおり、マントヒビのケージは2頭の赤ちゃんでぎわっています。

昨年のサル舎、ヒビ舎での繁殖はたいへん好調で8種10頭が生まれほとんどが育っています。とりわけ稀少なシオザル、美しいブラッサグェノン、今回のフランソワルトンの繁殖などが目を引きました。

§ 動物園のお正月

今年のエトはウマですが、動物園ではウマを飼育していません

ので、恒例のメ縄かざりはウマの仲間のシマウマ舎の前に、昨年の12月22日に飾り付けました。

また、これも恒例のエト



にちなむ動物 シマウマ舎のメ縄かざりの郷土玩具展は1月2日から31日まで展示館で開催しました。今年ウマの玩具186点とその他絵馬やエトの郷土玩具など合わせて400点を越える展示内容となりました。出品者は京都市在住の郷土玩具蒐集家の平田嘉一さんです。

1月2日、3日はレクチャールームで、園長の年頭のあいさつの後、動物映画会を開催し、入場者にはお年玉としてコアラクリップを配布しました。

● 動物園協会理事会

平成元年12月7日、動物園レクチャールームで西尾会長が出席して動物園協会理事会が開催され、本年度上半期事業などについて審議されました。

● テレフォンサービス実施中

催し物、トピックスなど魅力たっぷりの動物園の案内を24時間テレフォンサービスで行っています。毎月内容が変わりますのでご利用ください。

電話番号 771-9999

* 休園日のお知らせ *

動物園の休園日は毎月第3月曜日(休日の場合は翌日)です。2月の休園日は2月19日(月)です。なお、近々毎週月曜日が休園日になる予定です。開園時間は、午前9時30分から午後5時までで、午後4時に切符売り止めになります。

愛ある暮らし、応援します。

Kintetsu

近鉄百貨店

DEAR LIFE BOOKS



生態・飼育・図鑑が一つの本の 中にギッシリ

中川道朗・岩合徳光/監修
B5変型判・オールカラー
定価580円

動物園で暮らす様々な生き物達、
自然の中ではどんな暮らしをして
いるのか？ 動物園での世話
の仕方は？ 仲間とは？ など、
写真と精密イラストをまじえ紹
介します。

くらしかいかたシリーズ<既刊本>
B5変型判・オールカラー・各定価580円

むしくらしかいかた

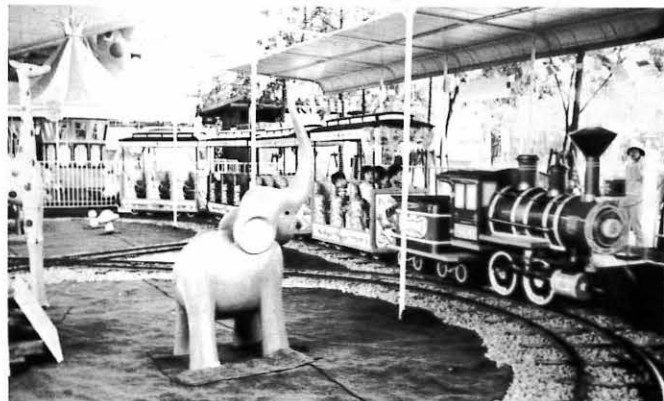
野山でみかける身近な昆虫たち
250種を紹介。

ちいさないきものくらしかいかた

昆虫以外の小さな生き物を320
種紹介。

お求めは、お近くの書店で。 ひかりのくに株式会社 本社/〒543 大阪市天王寺区上本町3-2 ☎06-768-1151代表

たのしいのりものが待っています。



1人1回
100円
(1才まで無料)

団体割引
(30人以上)
……1割引

久竹娛樂株式会社
TEL(06)541-3938(代)

◎園内3ヵ所(南園入口横、北園ステージ横、北園高架下)に各種のりものがあります。

オートフォーカスカメラに

フジカラー SUPER HG 400



ピントが合いやすいフィルムです

カラの大林

桜橋本店 ☎341-8091
三番街店 ☎372-5031

平岩米吉著

絶賛三版 猫の歴史と奇話

定価・2800円
送料・310円
A5判・260頁
口絵挿画・113図

猫に関する古今東西の科学と文献を網羅し、しかも平易な文章で綴った猫の宝典。著者の三十余年にわたる収集研鑽の成果、ここに結実。

☆学術書でありながら、推理もののように愉しく読める猫の本
☆架空の伝説は別に、猫の珍しい実話400余を収載

主な目次

- | | |
|-------------------------------------|---------------------------------------|
| 第一章 猫の歴史
欧州は古代エジプト、日本は宇多天皇から近世まで | 第二章 猫股伝説
老猫化けてさまざまな怪異をなす |
| 第三章 猫の報恩談
蛇を咬んだり、金を運んだりする | 第四章 野性猫の存在
裏日本の山猫、離島の山猫、鬱陵島の猫の渡来など |
| 第五章 猫の奇話(上)
長命、多産、三毛猫などの形態の奇話 | 第六章 猫の奇話(中)
長距離の帰家記録や鼠を育てるなど不思議な行動 |
| 第七章 猫の奇話(下)
マタビを媚薬とする奇妙な習性など | 第八章 益獣としての猫
あらゆる角度から猫の生態と効用を探究 |

発行 動物文学会 〒152/東京都目黒区自由が丘3-12-2
電話(03)717-1659・振替東京5-9800 発売 (株)池田書店 東京都新宿区弁天町43番地
振替・東京4-165425

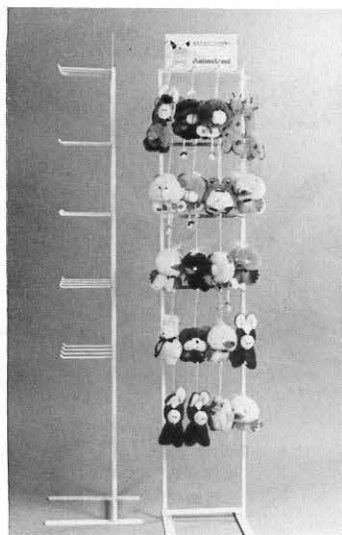
- 貸出品目/ビデオ「動物園へ行こう」
①巻・20分(10本常備)
- 対象/保育園、幼稚園、小学校の先生
- 貸出期間/10日間
- 貸出料/無料(但し、郵送料450円は必要)
- 申込先/当協会まで、電話かハガキでお申し込み下さい。

コアラテレホンカード(限定販売)
好評発売中 ¥800(50度用)



大阪市天王寺動物園協会

〒543/大阪市天王寺区茶臼山町6-74 ☎(06)771-0201



動物ぬいぐるみは 子供のゆかいなお友達

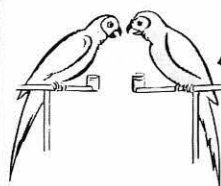
各種ぬいぐるみ企画・製造・卸

有限会社 **アニメランド**

〒547 大阪市平野区西脇4丁目5番22号

TEL: (06) 704-8580

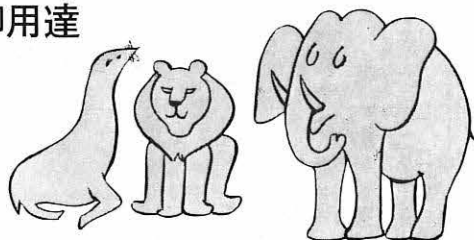
FAX: (06) 704-8565



鳥獣輸入

全国動物園水族館御用達

- ・医学実験用動物
- ・宣伝用、テレビ用、貸動物
- ・原色世界雑類図鑑(34種1枚もの)要郵便券250円

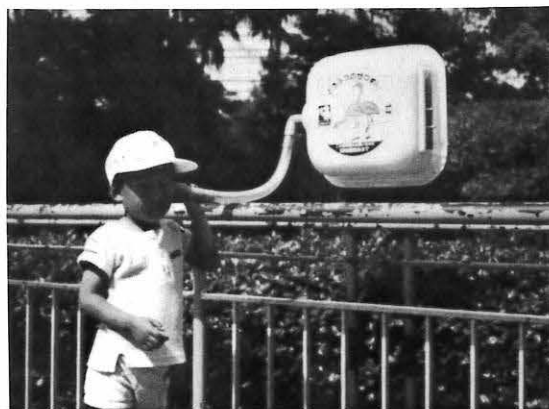


有限会社 **吉川商会**

本社 神戸市中央区中山手通3丁目11番4号
飼育場 兵庫県小野市来住町1513番地

電話(078)221-8195(代)

たのしい動物のお話は、
ガイドマシン(動物説明機)で、どうぞ!!



園内、主要動物舎
30数ヵ所にあります

関西特機株式会社

電話 06-762-2333

1回 20円

動物園内での お食事、ご休憩は

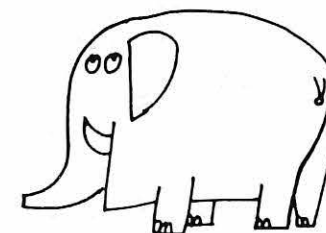
大阪市天王寺動物園内

中央売店

☎ (06) 771-0973



天王寺動物園内



南園売店

大阪市天王寺区茶臼山町6-74
電話 (06) 771-7110番

園内での写真は...

動物園協会指定写真部へご用命下さい!!



◎随時係員が待機して
おりますのでご説明
に伺いました際は、
よろしくお願い致します。

カラー写真 キャビネ1枚 500円

撮影無料にてキャビネ1枚をサービスさせて戴きます。
撮影予約も受付しておりますのでご連絡下さい。

国際航空写真株式会社

TEL 06-856-7444



雪印乳業

唯ちゃんも、
とってもゼリーも、
ますます成長しました。



浅香 唯

フルーツゼリー とっともゼリー



野生動物をみんなで守ろう

WE SUPPORT WILDLIFE!

天王寺動物園協会の売店に“WWF国際保護動物ぬいぐるみコーナー”が新設されました。このぬいぐるみの売上げの一部はWWFJ(世界野生生物基金日本委員会)に寄付されます。すばらしい野生動物を私たちの手で大切に守りましょう。

ぬいぐるみ販売コーナー新設

お申込み、お問合わせは——

社団法人 大阪市天王寺動物園協会
(天王寺動物園内) TEL (06) 771-0201

株式会社 ファミリア商事部
TEL (078) 321-0345

●お電話でのお申込みは動物園協会まで。
なお、郵送の場合は実費を負担していただきます。



●WWF(WORLD WILDLIFE FUND)とは?
世界野生生物基金。世界中の危機に瀕している動物たちと、その自然環境を保護するための機関です。



なきごえ 1990年2月10日発行(毎月10日発行) 第27巻 第2号 (通巻294号)

編集/大阪市天王寺動物園 〒543 大阪市天王寺区茶白山町6-74
発行人/大阪市天王寺動物園協会 橋本一郎 電話 大阪 (06) 771-0201
印刷所/株式会社 松村善進堂 定価100円(送料共) 1年継続(12部) 1,100円(送料共) 振替口座 大阪 37823

編集委員 (伊東重朗 / 藤野勝吉 / 中山良三郎 / 樽本 勲 / 中川哲男 / 齊田 尚 / 宮下 実 / 長瀬健二郎 / 榊原安昭)
森本委利 / 大野尊信 / 野口秀高 / 早川 篤 / 赤松 建 / 中垣圭史 / 大川光雄 / 山下賢二 / 土谷正道)